

抑圧社会と精神病院

永井久美子

（精神病院ソーシャル・ワーカー）

●自己史の中で

私の幼児期の魂は、常に家庭の陰うつをきわめた渦巻からのがれて、外へ外へと向かった。私は、両親の憎悪にみちた抗争に負けまいと、必死で私がこれまで属さなかったものに魂の平安を求めた。

それは、今考えれば、幼児期のパーソナリティに芽生えた防衛機制であったのかもしれない。私は家にいる時間をできるだけ少なくして、多くの時間を外的な集団——日曜学校（キリスト教の）に、一つの自己表現の場をみつけた。

崩壊家庭のなかで、子供のパーソナリティは、破壊的な流れにのめり込んでゆくか、私のように外的な集団を志向するかどうかで

ある。ともかく、私は一つの危機を脱出し社会適応できたのである。

私がその教会で出逢ったのは、キリスト教でもなく、むづかしい教典や、彼らの叫んでいるチャリティでもなかった。それは、魂に飢え渴いている人民と共に時の権力者を厳しく糾弾した大工の息子、人間イエスである。イエスはあらゆる富と権力の誘惑を排し、「人はパンのみにて生きるにあらず」と、権力者に対して徹底的に彼らの偽善をあばいた。また、明日食うパンもない貧民を前にしては、宗教や階級闘争は語らず、パンと魚で彼らの魂と肉体を満足させた。私の社会福祉とのかわりは、ここから始まったともいえる。

●社会構造と精神病院

●新たな生活空間を

力として再生産できる能力を持たない限り、シヤバへは出られない。病者は入院と同時に社会的権利を剥奪され、あたり前のことをさせないのがあたり前という病院の中で自己の人間としての欲求を抑圧し、治療という美名の下で管理されている。

治療者と病者の支配服従関係の中で抑圧されるのを拒否すれば、訴えの多い落ちつきのない不穏な病者としてレッテルをはられ、シヤバへの道もさらに遠くなる。病者の生きられる道（シヤバへの道）は、治療者の命令にすなおに服従してゆく——いわゆる良い子になることがシヤバへのパスポートになる。しかしそれは、一般労働者よりさらに搾取された低賃金労働者としての社会復帰でしかない。そして、病者のほとんどは機械のネジの役割もはたせない不要なゴミのごとく無価値なものとして、資本の論理から抹殺されて収容生活を強いられる。

このような状況のなかで、ソーシャル・ワーカーや医療労働者が自己の技術を向上させたり、個人的な善意で対処して周囲の偏見がなくなつたとしても、病者をしめ出してゆく社会の構造が変らないかぎり、根本的な問題解決にならない。

私の病院でのソーシャル・ワーカーとしての主要な業務は病者の社会復帰援助であるが、社会復帰を妨げる大きな要因は、企業主から日常茶飯事のごとく投げかけられる「能のない奴はどんだん首にする」という資本の論理である。高度経済成長のもとで商品生産体制の合理化、効率化を追求する能力・効率主義的な企業のなかでは、病者はあくまで合理性をそこなう無価値な危険物でしかない。そして、保安処分制度にみられるように、精神病者のみでなく体制に反逆するもの一切がその範ちゅうに入れられつつある。

このように精神病院は、社会学者の折原氏のいうごとく、体制に反逆する非合理性へのみせしめとしてある。しかも、江戸時代につくり出された身分制度のごとく階級対立を激化させないための制度的な隠蔽であり、「上を見ればきりがなく、下を見ればきりがなく」という言葉にもみられるように、下層にうつ積した欲求不満を発散させる安全装置でもある。

以上のように階級社会のなかでつくられた

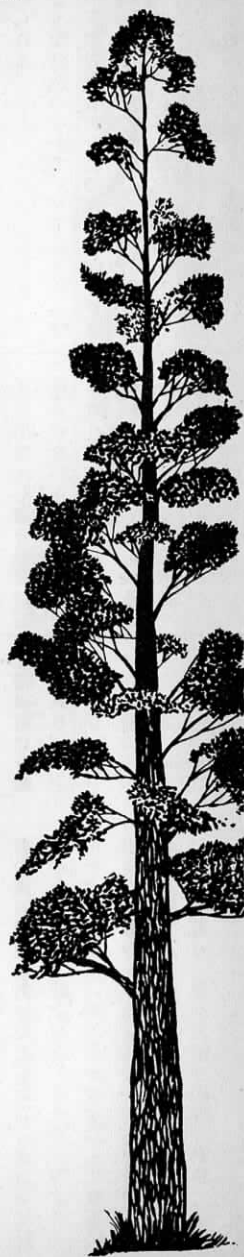
私は精神医療のなかで、ソーシャル・ワーカーとして病者とかかわればわかるほど、社会構造の中での精神病院、とりわけ国家権力の番犬として死刑執行人の役割を課せられている自分をみてジレンマに陥いる。精神病院の中でいかに病者にとって良いワーカーであらうとしても、私の意志とは無関係に外側から操作する怪物、国家権力の暴力を感じないわけにはゆかない。私はこの稿で、病者の社会的背景を中心にして述べてみたい。

最近、マスコミでは悪徳精神病院の告発と同時に、「精神病者の野放し」をとりあげて一般市民の病者に対する恐怖心をかり立てている。病者を市民社会の秩序を破壊する危険なものとしている。まるで病者を野犬のごとく鎖で縛ってオリにでもぶち込んでおけといっているかのようである。それは、国家権力を末端で支えている家族や地域——総体としての国家が精神病院に課した要求でもある。

このようにして、病者と呼ばれた人（以下「病者」と呼ぶ）は、社会生活が困難になつたという理由で治療の名を借りた精神病院（強制収容所）に隔離収容されてゆく。いったん収容されたら、刑期のない刑務所のごとく医者や家族の許可がない限り、あるいは労働

精神病院、そのなかでの病者と呼ばれる人々の治療とは一体何を意味するのか。そして、アブノーマル（異常）といわれる少数者をしめ出してゆくノーマル（正常）といわれる多数者の社会とは一体何か。また、キチガイといわれた人々をしめ出した正常者の社会を保持させ生活している福祉労働者としての私は一体何者か。

私は福祉労働者として強制収容所からの告発をすると同時に、福祉労働者の白衣を脱ぎ捨て、医者からの抑圧を病者への抑圧として精神的平衡を保っている秩序を逆転し、生命あるものに対するいくしみを育てる、真に個として類としてありうる生活空間を求めた。そんなところに、生活共同体である厚木振出塾に病者をつれていって、「ここなら病気にならないかもしれない」と病者に言わしめた原点があるかも知れない。それが絶対少数者の価値規範であつたとしたら、また仮に社会がキチガイと呼ぶなら、キチガイ万才ノキチガイの為の、真のキチガイにして真実に生きられるコミュニケーションのなかで、キチガイの鋭い刃物で、正常者の病を切りさいてゆくのだ。（筆者は、東京の精神病院で勤務）



小特集・福祉への視角

老境への憧憬と根拠地の再建 少年時の体験から考える

埴谷安弘

はじめに

今日ほど老人が軽んじられている時代はない。もはや役に立たぬ邪魔な存在として、社会の片隅に追いやりられ、対話を閉ざされつつある。これは悲しむべきことだ。

競争の時代には、人間の価値が、ただ単に

物的生産能力によっておし量られる。老人のみならず、力弱者はすべて置き捨てられるのだ。このような時代と社会は、全存在が非人間化に陥り、すでに内部から崩壊し滅亡していく危機の中にある。

何故このような事態にたち至ったのか。かつて「敬老」こそが、人類共同社会を継続発展させ、自らの生存を確保する思想的な基

ではなかったか。

この問題を解くためには、人間が到達する老境の中味——「思想的核」拠点」とでも呼ぶべきものと、それが形成されるに至った歴史的背景なるものを考察し、検討する必要がある。

最近、「古い」の問題がにわかに提起され、クローズアップされてきた。これは、今世紀

の末に、二度に亘って悲惨なる世界大戦を体験した人類が、直面している課題を、パンのみならず自らの精神史の枯渇としてとらえ、その反省的再構築への苦悶を意識しはじめたことを物語る。

ここに、問題解決への一助——「失われたものの回復」を求めて、拙い自己史の一端をひもとき、「老境への憧憬」を語ることをゆるしていただきたい。

幼なき日々よりあたたため続けた想い出の体験の数々……これらが、ぼくの記念すべき根拠地の思想の発祥であり、愛する兄弟にささぐ、ささやかな連帯の叙事詩である。

一、幼なき日より

ぼくらは幼ないころ何を考えていたのだろうか。

ぼくは、一九四〇年三月十七日に、いまの審陽、当時の満州、奉天市、雪見町に生まれた。一九四五年八月、そこで終戦を迎えた。

男の子一人、五人家族だった。満鉄の建築課に勤めていた父は終戦まじかに応召され、母が留守を守り、二つ上の姉と、二つ下の妹と四人で、杜宅の二階の茶の間の畳に正座し

て敗戦の詔勅を聴いた。

庭には黄色い花が一面に咲き乱れ、街路樹の舗装道路は、ひろく長く無音の静まりの中に、ギラギラした太陽を反射させ、大きなトンボが低く飛んでいた。

何かが起った。母の心にも……。子供心は敏感にそれをとらえた。

早くおもてへ出てあのヤンマをつかまえよう。飛び出したい。だが、その誘惑をグイと引き止める重く悲しい空気が家のすみずみに満ちていた。平凡な家庭……。侵略者……。表層的幸福……。

あの歌は何を意味していたのか。

黄土楽土ニ産マレタ、
我ラハ正義ノ朝ノ子ダ。
燃エル希望ニ輝イテ
正義ノ道ヲ真直グニ
足並ソロエ堂々ト
進メ我ラガ日本男児。

希望輝く日本男児たるぼくらに何が期待されていたのか。

我が家では即刻、軍歌に類する唱歌をうたうことが禁止された。「ソ連が侵入して来る

らしい。」と言ううわさが近所に伝わり、我が家では夕食後にロシア語の学習会が始まった。小さい口をそろえて勢いっぱいに、「アジン・ドアー・イウリー（一、二、三、）」「ハラジョ（よろしい）」「スパシーボ（ありがとう）」。何でまた……。

しかし、うわさは現実となった。忘れもしないあの広い街路樹の道を、シベリヤ經由のソ連戦車隊が、威厳をつくろう一群の隊列を整え、婦人兵もまじえて、モーゼル銃を肩に、「アジン・ドアー・トゥリー！」「ザック、ザック、ザック」と行進して来たのだ。ぼくら家族は、カーテンのすき間から息をこらしてその行軍を見ていた。ドサクサがはじまり、しばらくゴタゴタが続いた。近所の世話役たちは、「ロシア人に協力しましょう」「部屋を借しましょう」と、扉を叩いて回った。ぼくの家族は、父が帰っていないし、子供達も幼い、と言う理由から、扉を固く閉じて身を潜めていた。

しばらくして、ソツと窓から下を見ると、近所の子供たちが兵隊にねだって、ロシアのコンペイ糖をもらっているのが見えた。

げんきんだなあ、彼らは、つい最近まで、遊びながら「テンホ・メイユ（馬鹿）」と罵

りながら中国人（当時満人と呼んでいた）の子供に石を投げているのではありませんか。

ぼくも当時は、満州人の子供たちが、ぼくらの食べ捨てたスイカの皮をこっそり拾いにきて、年の大きな子と、小さいヨチヨチした子がそろって、皮に残った実にかぶりついていたのを、さびしく不可解な気持ちで見つめていたのではありませんか。ポロポロの黒い服を着ていた中国の子供たち……。

そんなわけで、ぼくらの家族は、ロシア兵からは何ももらわなかったし、もらいたくもなかった。ぼくらは家に籠ってひっそりと、人目をしるんで不安な日々を暮らした。

ロシア兵たちが近くに居ないのを確かめて、これも捨て身で、食べていくためにやむおえず豆腐を売りに来る日本人のおばさんから、わずかの豆腐を買って貴重な食糧源としたのだった。「一個一円のとーふー」と言う呼び声を聴くと、ソツと呼びよせ、ザルにお金を入れて長い紐でゆわえて、スルスルと二階からつりおろして、バケツの豆腐を入れてもらうのであった。

だが、そのような時にも神は見捨て給わずだった。我が家で家族同様に親切にしていた

中国人のお手伝いさんのおばさんが、ある日こっそりやって来て、新鮮な野菜を届けてくれたのだ。このような行為が、ぼくらをどんなに喜ばせ、励ましてくれたことだろう。

人は、どんな時にも、どんな人にも親切にしておくものだ。現地の抑圧され、搾取されてきた人たちによる焼き打ちや、強奪や、復讐のいやなうわさがあちこちからきこえてくる中であって、我が家にはささやかな平安があった。一時は脱出をあきらめ、一家で一緒に死んでしまうことを考えたくらい追いつめられていたのだから、ぼくの想像も及ばぬことが多い。

どこの国、いつの時代にも、自分さえもつかずに、機に乗じて人を困らせる人もおれば、何かを思い出して、善をほどこす人もいるものだ。誰だって、戦争の後のあんな状況下では、何が何だか判らなくなり、悪い本性が頭をもたげてくるのかもしれない。

或る日、ぼくらのかくれ家は、すさまじい靴音と共に、玄関の樫の木の下アを蹴破られた。「バンバン・バリーン」と、補強してあったはずの扉はひとたまりもなかった。

ぼくは二十才の頃、「アンネの日記」の劇を見ていた時、照明が消えた最後の幕場で聴

いた、扉を叩く激しい物音に戦慄したことがあった。

忘れもしない。破られた穴から腰をかがめて押し入って来たのは、六連発モーゼル銃をつきつけた紅白い顔のロシア青年兵の三人組であった。ぼくら四人の家族は一行に並んで、発作的にホールド・アップをした。

この時の光景は、矢張りぼくが青年になって見た「十三階段」と言う映画の中で、ゲットの前でホールド・アップされ、集めて来た食糧を奪われ、悲しげに小さな両手を挙げている青白い顔の少年の映像と二重映しになってよみがえってくる。ぼくが、何やかやと批判しながらも、流浪を体験し迫害されたユダヤの民に心ひかれるのは、このような少年の悲しい眼差しに、あらゆる理屈をこえて共鳴と憤りを感じるからかもしれない。

悲しいホールド・アップ。ぼくらの口から期せずして発せられた叫びは、「ハラシヨ、ハラシヨ、ハラシヨ」であった。母をはじめ、ぼくら家族一同、いのちさえ助かれば、全て全て「ハラシヨ、ハラシヨ、ハラシヨ」なのだ。ここで死んで、死に切れない。

苦勞してリュックで運んで来たリングが、芯までも大切に味い食べた食糧源は、たった

の1かじりで噛り捨てられ床に散らばった。時計という時計、金属製の食器という食器は、大小のスプーン、フォーク、ナイフをはじめとして、長靴のすき間や、ズック袋の中につめ込まれ、壁の額はふつとばされ、引き出しと引き出しは抜きすてられ、床上は混乱をきわめて来た。

「今だ！」

どこをどのようにして逃げのびたのかは、はつきりと覚えていないが、母が彼らの略奪のすきを見て、ぼくと妹の手をにぎり、姉と共に、今蹴破られたばかりの扉の穴をぐり抜け、階段をかけおり、ころぶようにして走り出したことは確かだ。

「たすけてください。」

「たすけてください。」

ぼくらは、生まれてはじめて叫びながら表を走った。すばやく靴をもつて出た沈着で常に賢明だった姉を除いては、みんなハダシで近くの家の窓から声をかけて回ったが、誰も外に出て来ず、家々の扉は沈黙をまもっていた。ぼくらの叫びが警鐘となって、各戸の扉を「層かたく閉ざしめたのであろう。」

ようやくのこと、かなり離れていた一軒の家の扉が細めに開かれ、「早く、早く」と招

き入れてくれたのだ。その家は、常日頃おつき合いをすることも少なく、初対面の家族であり、屋根裏をうまく改造して生活していた。ながい時間が経って、ぼくらの家族は落ちつきをとりもどし、汚れた足も気恥しく、畳に正座して、母はいいねいに、ふかふかと「ありがとうございました」と頭をさげた。見も知らぬ家族のなぐさめの言葉は、どんなにありがたかったことだろう。

ぼくは幼なき日に三度正座した。不本意ながら三度、居すまいを正されたのだ。

三度目は、長い柄のまきわりと、長い銃身のピストルを持って、台所のガラス戸を破って押し入った日本人の四人組強盗を眼前にしてある。さすがに彼らは覆面をして、「金を出せ」とおどした。母は、「子供たちよ、起きなさい」とぼくらを起こし、フツンの上に正座させた。

「よく覚えておきなさい、これが強盗という者です」「戦争に敗けたとはいえ、それでもあなた方は日本人ですか」と母は論じた。彼らは一瞬ひるんだようだったが、「つべこべ言わずに金を出せ」と居直った。その頃は父も帰って来て帰る支度を急いでいた時であったが、意外とあつさりと、いくらかの持ち

金を投げ出した。彼らはブツブツ言いながらもそれらをもつて逃げた。

このようにあいついで、ぼくらの家族に死が同居しはじめた時、ぼくらの覚悟はすでに決っていた。「まちがった生き方をするよりも、正直に生きて、共に死のうではないか」ということであつた。共に死ぬことを恐れず、可能な限り、赦される限りたくましく生き続けようということであつた。協力し合い、知恵を働かせ、耐えるだけ耐えて何とか生きのびることだ。

かくて、暗い落日の日々は、またと味えぬユーモアを秘めて、輝きの季節、冒険を恐れぬ日々と変ったのだ。ぼくらに残された道は、今日一日を楽しく充実させ、且つ明日への備えを忘れず、計画的に一日一日を生きて、脱出のための蓄積を急ぐことであつた。必ずや、帰れる日が来るであろうから。

一度は混乱の中で分裂し、めいめいが自分勝手に、自己の家族中心に生きのびようと企て、自らの殻の中に閉じこもり、ゆき詰りを感じて来た。トントン・トンカラリンの隣り組が、気まずさを乗り越えて再結束しはじめには、更には人間信頼の大切さを気付くまでには、スチーム煖房のきかなくなった寒

く厳しい満州の冬を越して、引き揚げ船が来ると言う情報が確かめられるまでの期間を要した。

私たちの家族は、一九四五のクリスマス、近所の子供たちを集めて、灯火管制が続いている中にも盛大に祝った。それは、私たちにあって、いのちの和解の誓、小さな運命共同体の出発の、いのちのまつりであった。アルミの弁当箱を用いて母が作ってくれたトウモロコシ粉の蒸しパンが、甘く、やわらかく、ぼくら子供らの舌を満足させた。

招かれた近所の子供たちと共に、ぼくらは頬をあかくしながら、クリスマス歌をうたい、グループに分かれてお遊戯をした。七才の姉は、二人の女の子と、「ひなの歌」をうたった。それは、「親どりが大切に七つのたまごを温め、ようやくかえった七つのかわいいひなのその中に、たった一羽、目なし鳥が居たが……」と言う内容のうただった。

ぼくら男の子たちは、勇ましく「サンタクロースの歌」をうたって、お遊戯をした。

雪がつもって野も山も

真白な世界となりました。

カラン・コロンと鈴の音

ソラ来た、あそこに、そら見えた。
そりに乗ったサンタクロース、
白いおひげのおじいさん

ぼくはこの歌によって力を得て、久しぶりに脱出の空を飛ぶ夢にもうなされず、思う存分に熟睡を楽しみ、新しい朝を迎えたのであった。

一九六七年の十二月、ぼくが二十七才にもなつて、根拠地の思想に基く、いささかの青春の反撃を試みる中で、砂川（注——米軍の立川基地拡張反対運動で知られた場所。筆者はここで「砂川青年の家」をつくり、それは反戦平和運動の拠点となった。）の子供たちを招き、盛大にクリスマス祝ったのは、この幼き日の体験をバネにしてであった。ぼくの中で、満州の幼なき日々と、内なる砂川は直結していたのである。ぼくは幼なき日に、愛する家族と共に死をくぐり、若き日に創り主の召命を受けて死をくぐった。

一九七〇年、ぼくが少年の頃より「三十才まで生きられれば悔いなし」と念じていたその年が、大いなる危機の下で、危険なる共同体形成の実験過程の中で、主の救いと恵みの年として到来し、自らが再び解放された。青

年の家の時代から壮年の季節を迎えた今、ぼくは結婚した伴侶と、八ヶ月の初児と、老いたる父母と共に、根拠地再建の途上にある。

二、老境の思想的拠点

ぼくらは少年の日に、自らの老境を想い描いたことがあるだろうか。愛する者や、友人、家族、幼なき者たちの老境の姿を、今、想像し得るだろうか。

幸いなる哉、老境迎えし者、死をくぐりし者よ。悲愴なる哉、若き日に遺言状を書き記した者よ。

ぼくらの老境は、略奪の悲しき時代に、一度奪い去られ、今新たに備えられつつある。それは自づと、荒浪に鍛えぬかれたものとして我々の前に立ち現われる。

幼なき日からぼくらの家族は、まさに一切のパンと一杯の水を求めて奔走し、しばしの安眠をむさばり、ただがむしやに、そうだ、只がむしやに生活を闘って来た。そこでは、お互いの無事を確かめ合い、温かな僅かの粥をすすり分かち合うことが喜びであり慰めであった。

二十世紀後半は、世界を覆う戦争の暗雲の

時代、神なき殺戮の時代、終末が予告された悪夢の時代であった。神と人間への不信と迷妄が錯綜するこの苛酷な季節に、「老い」を考察するゆとりがあったであろうか。否、否、断固として否、である。死が同居している日常は、むかしも今も変わらないであろうが、歴史への厳しい批判と反省的考察を抜きにして「老境」は語れないのである。

老境を意識するめざめし者よ。今からでも遅くはない、自らの人生史、自己の存立の思想的根拠を問い直し、築きかため、語り伝えるべき内容を煮つめて、若者と幼なき世代への継承と共闘を確立されんことを……。

「老境への憧憬」とは、老いてますます鮮明、強固となっていく霊的召命と、永遠なる者——真理との対話を身近かに顕現している「いきるいのちの存在体」への崇敬と思慕、隣人から全人類への大いなる愛の祈りと共鳴にはかならない。

それは、幼ない頃から少年期に向って、すべての人の心に潜在的に芽生え、良心の呼吸のさわやかさを人知れず味わい、ささやかな善の実践の喜びを意識し大切にきて来た者が体験する境地であり、当然帰着すべき地点なのだ。

ぼくらの身近かな周囲にも、そのような老境を生きる老人がたくさんいるはずだ。

ぼくが、自ら選びとった断食の日々の中で、未払いの下宿代にもこたわらず、一菜一汁を添えて朝の出発を励ましてくれたお婆さんにしても、子供が居なかったせいかもしれないが、誰にでも平等に親切で、近所の年よりを訪ねたり、お茶にさそったりするのが好きだった。生活も規律正しく、八十才の坂を越えても、判断が的確で、若者への示唆も豊富であった。

人が自己の死を射程内に置いて生き方を考察する時、すでに思想的老境がはじまり、新しい人生の総括・最終的展開の方向づけが期待されている。老境こそ、創造の種を蒔くにふさわしい、神の祝福の季節なのだ。老境の対話を大切にしたい。幼老をむすぶ根拠地の再建をめざして。

三、霊の分割

困難を極める共同体の継承、ひとたびその選択をまちがえば、愛する者たちもろ共、歴史の藻屑として消え去る運命となる。
霊の分割——それは、個から個、個から共

団体へと分与され、受け継がれていく永遠なるいのちの保証であり、おごそかな霊的秘蹟である。

ここに謂う「霊」とは、復讐や、剣をふるう戦の霊、謀議、謀略の霊、人をそこなう霊ではなく、いのちへの愛、平和への愛、寛容と柔和の霊、痛み傷つける者を癒し、絶望せる者をふるいたたせ、人を活かす復活の霊、自由に積極的にはたらく創造の霊である。

破壊への速度を凌ぎ、創造の速度を速めよ。全きものが現われると、部分的なものはすたれ、反と叛の思想は止揚される。

一粒の麦の種は、すでに地上に蒔かれた。霊の分割は、一本の十字架を契機として進行している。

若き日に生命を奪われ、誰も彼の肉の子孫については語り得ない。真に彼を理解したのは誰であったのか。過ぎ越しの祭の夜、かくれ家の二階の広間で、愛と死の昂奮につつまれて行われた霊の分割とは何か。

歴史は曲折し、混迷は深まる。しかし、かつておぼろげに見ていたものを、あきらかにはっきりと見る時が必ず来るであろう。

霊の分割は、或る日突然、上よりの炎の直撃として、一陣の風の中で確認され、みたさ

れた個々の舌によって、同時に各国の言葉で語られ告白されるのである。述べ伝えられ、語り継がれるのである。語り継ぐべき霊の言葉を信じ、渴望せし者は幸いなる哉。

かくて霊の分割は、民族、血族、血縁を越え、愛する子もまた火と水をくぐった。

先の者は後になり、夢を見、後の者は先に進み幻を見る。

かの柔和なる愛の同志ヨハネは、復活のイエス、キリストの霊の証人であった。老マリヤを託され、地を受け継ぐにふさわしい温和さの中にも火の信仰を保ち続けた。彼の老年は、はるか離れたバトモスの島に独り幽閉される身であった。だが彼は屈することなく迫害の中にあっても神を讃美し、大いなる霊をもつて黙示を書き記した。

新しきエルサレムの降臨。主の集いを忘れぬ二人、三人の交わりと祈りによって支えられる愛のエクレーシア。キリスト再臨の予告。これらは如何にして思想的に継承され、後の世に実現を見たか。

ばくはこの文章のはじめに、ロシア青年との悲しむべき出会いを語ったが、その幼い頃の思い出を償って余りある大いなる慰めを、同じロシアの思想作品の中に発見して感慨を

新たにしたいことがある。そのことを記そう。くしくも老ヨハネが、生前キリスト・イエスの霊の分割を受け、その系譜の一つが、ロシア大陸の荒地の一角に芽生えたのである。ばくの青年期のはじめ、ばくの心をうるおしてくれた愛読書に、『カラマゾフの兄弟』がある。その中に、長老ゾシマの死に直面して僧院を去り、混とんだ世間の荒浪に分け入っていくアリョーシャの姿は印象的だ。

更に、ばくが最も好きな部分は、一老人によって語られる「一フントのくるみの実」のエピソードである。

父親殺しの無実の罪でぬれ衣を着せられたカラマゾフ家の長男ドゥミトリの弁護に、敢然と彼は立つ。被告の幼年期を語る法廷の証言は一同に深い感銘を与えた。

幼なきドゥミトリは、誰一人としてかまってくれる人なく、ほったらかしにされ、毎日鼻水をたらしながら、はだして遊びまわっていた。近くに住んでそれを見ていたかの老人は、或る日彼をよびよせ、一フントのくるみの実——おそらく小さな手にはあふれるほどのくるみの実を子供に与えて言いきかすのだった。「いいかね、坊や、『父なる神、子なる神、そして聖霊なる神』だよ。」

幼なき子供は、成人になっても、この老人のことを忘れず、心のすみに刻んでいたのだ。彼は放蕩に足をすくわれ、その生活は混乱していたが、無実であったのだ。幼なき日のふとした出来事。しかし、霊は彼に味方して離れなかったのである。老人も、この幼なき日のことを忘れてはいなかった。見える連帯の絆。「一フントのくるみの実」——この感激の光景は、ばくの心に何かを示唆してやまなかった。

一つ一つのかたいくるみの殻の中には、いかに豊かな味わいと、喜びと、可能性が秘められていたことだろうか。少年の心のかたい殻を打ち砕いていく人生の脱皮は、老いたる者との共闘として歴史的に展開するのだ。

丘の上、高く澄んだ空と静かに流れる雲。はるかにひろがる青い大きな海。すきとおる風にやわらかな髪をなびかせ、天空を仰いで独り立つ少年の心に、老への憧憬が芽生える。わんわんと耳に迫った蟬の声や、地上をとびまわり、はねまわった虫たちや、ムンムンする草いきれも、鼻をくすぐる花粉の香りも今は消えて、赤トンボがキラキラと飛び交い秋の鐘はしんとと波動を送る。独り立つ人生。一回きりの人生。時間への期待と不安が

映画によるユートピア追求

「結局、『心やさしさ』が一番必要だということがよくわかりました。」と古沢憲吾氏は瞳を輝かせながら言った。

五〇才をすでに越した彼は私財を投げ出して「東京キッドの漂流記・ユートピア」という映画を作った。この映画を撮るために、彼は、東京キッド・ブラザーズの団員を含む百人の若者たちとともに四カ月のヨーロッパ漂流旅行をしつつ、彼らの「動く共同生活」の中にユートピアの可能性をさぐりつづけたのである。四カ月のうちには対立や葛藤もあったという。

協会の事務所顔を出した吉沢氏は、「大切なのは制度や形式の問題ではなく、まず一人一人が変わってゆくことだと思います」と強調していた。

彼はこの映画をタタキ台にして全国の若者たちと「あるべき社会」について話し合い、かつ若者たちが地域社会を変革してゆくための手伝いをしたいという。

(この映画に興味ある人は、調布市染地多摩川住宅は—三—〇吉沢憲吾まで)

少年の心をよぎる。愉快な遊び友達も、父の声も、母の声も少年の心には響かない。古いゆく家族の寝息を数えながら少年の想いと体は、小さな家の屋根をつき破り、星空の中空を泳ぎ出てさまよい飛ぶ。このような時に對話者、導き手が求められる。

幼なきサムエルは、深夜小さな手を合わせて神に祈る。めばえの季節は幼少年期、ふるとおののきの中に始まる。様々な声の中から、自己の生き方を導く神の声を正しく聴くことは至難である。はたして我が名を呼ぶ者の正体は何か。

主の言葉はまれで、黙示も常ならぬ頃、民の指導祭司エリは、しだいに目がかすみ、見ることができなくなる老境であった。

主は「サムエル！サムエル！」と三度にわたり童子サムエルの名を呼んだ。サムエルはまだ主を知らず、主の言葉がまだ彼に現われなかった。老エリは、この小さな真摯な志をもつ同志に、それが主の声である事と、「祈り」を教える。「しもべ聴く、主よ語り給え。」これがサムエルの祈りであり、全ての者に示された祈りの姿勢の真髄である。

今や、古き契約の時代から、新しい血の契約の時代へと人類の歴史は流れ下り、あらた

(一九七二年九月三日記す)